

日本が先導する縮小文化時代

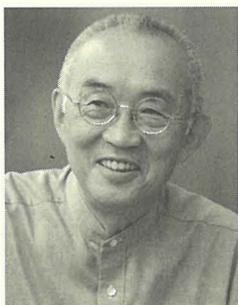
東京大学名誉教授
つきおよしお
月尾嘉男

日本が創出した縮小文化

茶葉の原産は中国雲南の奥地、喫茶の風習は四千年前の中国四川を起源とするが、それは医薬を主要な目的とし、茶道という芸道へ昇華させたのは桃山時代以降の日本である。その神髄を裏千家大宗匠・千玄室氏に質問したところ、茶釜は「金」、茶水は「水」、炭火は「火」、茶碗は「土」、抹茶は「木」というように、宇宙を

構成する五大要素がすべて凝縮されている茶碗一杯の抹茶に宇宙を感得することであると教示された。

盆栽も中国唐代以前の盆景を起源とし、日本には平安時代末期に伝達されたようであるが、現在、世界で「BONSAI」として通用する繊細な技法にまで発展させたのは江戸時代の日本である。これもめざすところは一本の小樹に宇宙を表現する



ことである。一杯の抹茶、一本の樹木に宇宙を凝縮するような縮小文化は、韓国の学者が椰掬気味に日本にしか存在しない特徴と指摘したが、西欧の風習と比較すると、的確な分

析である。

フロシキが象徴する縮小文化

ヴェルサイユ宮殿は約八〇〇ヘクタールの土地にルイ王朝の栄華を表現したものであるが、日本の宮殿は皇居でさえ、その何分の一ほどの面積でしかない。食事も次々と給仕される多種多様な料理を多数の食器で賞味する西洋料理に比較すれば、一膳の割箸と重箱の料理をたしなむ日本料理は対局にある。一時は第二芸術と揶揄された俳句も、わずか一七文字で森羅万象を表現できると理解すれば、簡素な芸術の極致である。

所詮は狭隘な国土を背景にした文化であり、世界の多数の文化のなかの一種ということかもしれないが、地球環境問題が切迫した事態に直面している現在、この縮小文化は重要な役割を期待されるようになってきた。一例は日本政府が世界に普及させようとしているフロシキである。長年の利用により、酒瓶や水瓜をはじめ、どのような品物でも確実に包装する手法が工夫され、しかも何度でも利用できるという素晴らしい縮

小文化である。

縮小文化の普及は日本の使命

しかし、縮小するということは資源やエネルギーを無駄にせず、環境問題の解決に貢献するという理由で重要であるだけでなく、人類の方向を転換するという意味でも重要である。旧約聖書の冒頭には、天地を創造した大神が人間を誕生させ、その人間を増加することを命令したという記述がある。その命令は忠実に実行され、世界の人口は六七億人まで増加してきたが、それが現在の環境問題だけではなく社会問題の原因にもなっている。

この増大という概念は、西洋社会では疑念なく正義であり正解であるとして解釈されてきた。近代の日本も追随し、人口減少へ対処する大臣が任命され、全国各地が移住による人口増加を画策しているように、国家でも地域でも、減少は憂慮すべき事態と理解されている。企業も売上げや利益が減少すれば、経営責任のある人間が交替するほどの問題としてい

多数であれば内容は不問とされる。

しかし、人類が有限の地球に生存するかがぎり、無限の増大を達成できないことは自明であり、人類は縮小の方向に転換しなければならぬが、そこで日本が育成してきた縮小文化が有効になる。この縮小は精密機械のように事物を微細にすることではない。一杯の抹茶が象徴するように、物質として縮小していけばいくほど精神が拡大していく縮小である。これこそが地球の限界に到達した人類に突破の糸口を提示する文化である。

政治も経済もグローバリズムの潮流に翻弄され、世界における日本の地位は低下し、国民は自信を喪失している。しかし、大陸の端部にある島国で何千年間も醸成してきた縮小文化は、有限の地球で人類が限界に直面している現在、重要な存在として浮上してきた。この文化を端部から世界へ逆流させていくことこそ日本が世界に貢献できる必須の役割であり、それを実現できたとき、国家そして国民は、再度、自信を奪回するはずである。